

梁川高校では、昼休みにパンの販売を行っている。このこと自体は珍しいことではない。他の高校でも行われていることである。販売業務に当たってくださっているのは、伊達市保原町にある「児童発達支援事業所ハイジ」の皆さんである。なぜ「ハイジ」なのか。ホームページには以下のようにある。

アルプスの少女・ハイジは、いろいろな人々との関わりの中で育てられたように、また、いろいろな人々に影響を与えたように、当グループ内にある、障がいのある方の就労の施設、高齢者施設との連携、そして地域の方たちとの関わりの中で健やかに育っていけるように支援します。

ハイジさんの方では就労体験として本校でのパン販売を行っている。そのおかげで本校では希望者が昼食の時間にパンを購入することができる。申し訳ないのは、本校は他校に比べて生徒数が少ないためにパンの販売数も少なくなってしまうことである。昼休みが終わる頃に、一つでもパンが売れ残っていると益々申し訳ない気持ちになってくる。

先日、生徒に混じって私もパンを買わせていただいた。おいしかった。一人でコンビニエンスストアに行って食べるパンとは違った。決してコンビニのパンがおいしくないわけではない。食べ物というのは、食事というのは、誰とどういう状況で食べるかによっておいしさが変わってくる。私は二度単身赴任を経験しているが、一人で食べる食事をおいしいと思ったことはない。

なぜ本校で買うパンがおいしいのか。それは、もともとのおいしさに加えてハイジさんとのやりとりを通して買うからだと思う。何か気持ちが温かくなる。優しい気持ちでパンを口にすることができる。

加えて先日は、3年生の選択科目「器楽」の授業でピアノ発表会が催された。3年生の4月からピアノを弾き始めたという“7人のピアニスト”が今までの成果を披露してくれた。緊張感と一生懸命さが伝わってくる素敵な発表会だった。この前まで野球少年だった男子生徒が秦基博さんの「ひまわりの約束」や中島みゆきさんの「糸」を両手で弾くのである。何だか親のような気分になってきて涙が浮かんでしまう。

私も大学時代にピアノの練習をした。左手が動くようになり、とりあえず一つの曲を最後まで弾けるようになった喜びは今でも覚えている。私は断言できる。大学時代に一番がんばったものはピアノである。とにかく単位を取るのに必死だった。だから、男子生徒が一生懸命弾く姿に昔の自分を重ねてしまったのである。

発表会が終わって“7人のピアニスト”はみんないい笑顔をしていた。その後にパンを買った。ハイジさんと生徒のおかげで格別おいしいパンになった。ハイジさんのホームページに「子どもの育ちには、環境と経験が何よりも大切です」とある。梁川高校の環境で何ができるか。そしてどんな経験を積み上げていけるか。これからも模索していきたい。